

佳作

開聞岳と私

鹿児島県さつま町立永野小学校六年 森山 桜妃

「桜妃ちゃん、この本、読んでみたら。」と図書室の先生に一冊の本をすすめられた。それは、『大地からの祈り』という知覧特攻基地について書かれた本だった。この本は指宿市にある開聞岳が見つめた悲しい戦争の話だった。

開聞岳の近くには知覧特攻基地がある。戦争のときには、特攻作戦と呼ばれる二百五十キログラムの爆弾をつんだ戦闘機にパイロットが乗って、敵の船に体当たりをして沈める作戦があった。パイロットは必ず死ぬ。必死の作戦だ。死なずにすむもつといい方法はなかったのだろうか。

私は、今まで私が住む鹿児島に特攻基地があることを知らなかった。戦争があったことは知っていたが、知覧だけでなく、万世特攻基地やかのや特攻基地という合わせて三カ所もの特攻基地があったこと

をこの本を読んで、初めて知った。

現在、特攻基地があった場所には、平和記念館があることを知り、父に頼んで、連れて行ってもらった。

そこには、たくさんの特攻隊員が家族にあてて書いた最後の手紙が展示されていた。家族に対する感謝の気持ちや、家族の健康を祈る内容の手紙だった。もうすぐ自分が死ぬと分かっている、こわくなかったのか。まだやりたいことがあったんじゃないか。どんな気持ちでこの手紙を書いたんだろう。そう考えると、涙が出そうになった。

暗くてせまい三角兵舎の中で出げきまでの数日間を過ごし、たった一人で特攻機に乗り込んで、出発していく特攻隊員の気持ちを考えると、今私が暮らしている生活がとてもぜいたくなものに思えてきた。宿題をしたくない。テレビを見たい。ゲームで遊びたい……。学ぶことも遊ぶことも、そして家族と一緒に過ごすことも、戦争によってうばわれてしまった。たくさんの特攻隊員は、今の私を見て、どう思うのだろう。今まで戦争のことも、そのぎせいとなった人たちのことも、知ろうとしなければ悲しい歴史をなかったこととして生活していただろう。

今年七十三回目となる終戦記念日をむかえた。戦争を知らない私たちが、この悲しい出来事をくり返さないように一人一人が戦争について学び、平和を愛する気持ちをもって、一日一日を過ごすことが、戦争で亡くなった方々に対する追とうになるのではないだろうか。亡くなった方々が、少しでも安らぐよう、一日一日を大切に過ごしていきたい。

平和記念館からの帰りに、開聞山麓自然公園に寄った。目の前には、太平洋が広がり、天然記念物のトカラ馬が静かに草を食べていた。開聞岳は、この平和な景色を見て、どう思っているのだろう。平和がこの先もずっと続くように、私も開聞岳と一緒に願っていききたいと思う。